

## 自由の声

No. 7 発行 アジア・アフリカと共に歩む会  
Published by  
Together with Africa and Asia Association

アジア・アフリカと共に歩む会の活動

## 3年間を振り返って

佐保 美恵子

フリーライター。1988年より1994年まで計5回、通算約400日  
にわたって南アフリカ共和国を取材。現在は雑誌のほか、8ミリビデオの  
取材で映像記者としても活躍中。著書「マリーの選択」(文芸春秋社)

教育問題は南アフリカの重要課題

1994年5月、南アフリカで全人種初参加の総選挙が行なわれ、半世紀続いてきたアパルトヘイト体制が完全に崩壊しました。そして今、現地では黒人主導型の新しい国づくりが進んでいます。抑圧者と被抑圧者として長年対立してきた白人と非白人(黒人、カラード、インド系住民)が、悲惨な歴史や差別意識を乗り越えて、共に生きていこうという歴史を塗り替えるような政策ですから、その国づくりは並大抵のことではありません。

中でも新政権にとって、急務とされるもののひとつが教育状況の改善です。アパルトヘイト時代には、黒人には義務教育がありませんでした。経済的には豊かな白人(人口の13%)が16歳まで無償で教育を受けられるのに対して、貧しい黒人(人口の76%)の方が学費を払って学校に通う、という矛盾が罷り通っていたのです。

ここ数年、都市部では確かに教育現場の人種融合が進んでいますが、農村部や旧黒人居

レトリア近郊ジェフスビルにて トタン板を葺り合わせた住居 1994年3月→  
電気・水道・下水・ゴミ処理がない

住区の学校では、まだ十分な教材や机、椅子もなく、先生の数も足りないという現実が続いています。アパルトヘイト時代に政治闘争に身を投じ、まともな教育を受けられなかった若者が多いのも問題です。また男尊女卑的な習慣が残る農村部では、読み書きのできない女性が圧倒的に多く、黒人女性の識字率は40%に充たないといわれています。

そこで現政府は政策の要、国家復興開発計画の中で、全人種に10年間の無償教育を実施するという提案を打ち出しました。その実現にかかる膨大な予算を賄うには、海外からの支援は不可欠です。また政府レベルとは別に現地ではアパルトヘイト時代から、反アパ



トヘイト運動と連携して、識字教育に取り組んできた市民団体も多く、彼らの活動は今も脈々と続いています。

小さな思いつきから  
本集めの活動が始まって

「アジア・アフリカと共に歩む会」は1992年の春に発足しました。マンデラ氏（現大統領）の釈放、ANC（アフリカ民族会議／現在の第一党）の合法化、アパルトヘイト関連法の撤廃の後、1992年といえば武力抗争の犠牲者が続出し、南アフリカが新時代に向けて生みの苦しみを味わっていた時期です。

当時、ボランティアとしてANC東京事務所に通っていた同会の代表・野田千香子（塾講師）は、1992年6月に来日した女性団体委員長から、識字教育のために英語の本が必要であることを聞き、一念発起します。

「南アフリカと日本は貿易量も多く深い関係がある。その日本がアパルトヘイト（人種隔離）問題に知らんぶりじゃ駄目！ それなら何が自分たちにできることから始めよう」

そんな一市民の素朴な思いが行動の原点でした。集める本は使い古しの英語の教科書、英文の小説、雑誌など。やがて野田の意図に賛同した会社員、教員、主婦、学生など仲間6人が集まり、海外支援には全く素人のグループが手探りで本集めを開始していきます。

全国各地に広がり続ける支援の輪

「果たしてどれだけ本が集まるやら……」。初めは半信半疑だった仲間たちですが、蓋を開けてみてびっくり。最初の2ヵ月間で集まった本は、予想外の約6000冊でした。同会に関する新聞記事を読んだ女子高生が、校内で何百冊もの本を集めて送ってくる、という



本をまとめるようになったコマネさん(中央)の来日 1992.6

ケースも多々ありました。当時集まった本の三分の一は、全国各地の高校から寄せられたものです。またインターナショナルスクールや出版社などからも、不要の教科書が次々と到着しました。この数は年ごとに増え続け、活動を始めて1年目で約20000冊、2年目の1994年秋までには約50000冊の本を南アフリカに送ることができました。

現地での主な受入れ先はジョハネスバーグ近郊の教育団体「イーストランド教育フォーラム」、キンバリーの「ヘレン・ジョセフ女性開発センター」、ダーバンの教育団体「英語教育財団」、トランスカイの「イシナンバ地域開発センター」など。いずれもアパルトヘイト時代から、英語教育を通じて黒人たちの自立を模索し続けてきた市民団体です。

人々の素朴な思いが支える地道な活動

月に一度、会の中心メンバーによって、全国から送られてきた本が仕分けされ、梱包作業が進められます。本を黙々とダンボール箱につめ、重さを計り、出庫用の倉庫に運び込む——この単調で地味な作業に参加しているのは、同会事務局の周辺から集まる20人ほどのボランティアの人々。その参加者は10代の高校生から60代の男性までと、年齢層も職



南ア訪問の際、小さな教会で数10箱の本を届け、学校に分配した。

業も幅があるのが特徴です。

「無理せずに自分ができる範囲で、人のために働けるのがいい」

「発送作業に参加することで、いろんな職種、年齢の人と出会い、勉強になります」

「今まで遠かった南アフリカの問題が、本を送るという単純なことを通して、とても身近に考えさせられるようになりました」

参加者の意見は様々ですが、共通点は義務感や使命感からというよりも、むしろ肩の力を抜いた自然態の姿勢です。そんな人々の集まりだから、会全体がいつもアットホームな雰囲気を保っているのでしょう。

一方、深刻な財政難に陥っていた輸送経費に関しても、ありがたい出会いがありました。日本の大手商船会社が1993年秋から、南アフリカまでの本の輸送を無料で引き受けてくれているのです。ただ船便では送れない地域や少数発送の地域もあり、本の在庫に比べ、輸送費はまだまだ足りないのが現状です。

本の収集・発送作業の他に、南アフリカ関係の講演の企画と実施、会報「南アフリカ——自由の声」の発行（全国約700の個人・団体に年数回発送）、援助物資（辞典、英語のテキスト）の購入・発送なども同会の中心メンバーによって行われます。こうした活動の経費は、主に個人・団体からの寄付、民間財団からの助成金で賄われています。

#### 現地からの声

「もっと、もっと多くの本を！」

1994年3月、同会から野田と下谷（教員）が初めて現地を視察しました。

「イーストランド教育フォーラム」（代表は敬虔なクリスチャンの白人夫妻）や「英語教育財団」を訪ね、到着した本の配付会にも立ち会い、実際にいくつかの学校や施設も訪問しました。

80人のクラスで3人に1冊の教科書という小学校、黒板や教室も満足にない学校、図書室の書棚が空いたままのコミュニティーセンターなど、アパルトヘイト廃止後も黒人社会でいかに本が不足しているかを、目の当たりにさせられたといえます。

一方、現地の教育関係者からの声として圧倒的に多かったのが、「もっと多くの本を送ってほしい」という意見。また「本の有効な使い方も教えてほしい」「教育のガイドラインを送ってほしい」「先生や図書館員を日本で研修させたい」などの意見もありました。本以外にも教材用にテレビ、ビデオ、コピー機、カセット・レコーダーなどの機械も必要という声も相次いでいます。

「現地を見て教科書寄贈がどれほど求められているか、よく分かりました。何万冊送っても大海の一滴にすぎないけれど、どれほど必要かが分かったので、今後も運動を継続していきます」とは、視察を終えた野田代表のコメントです。

#### 日本と南アの小さな架け橋 移動図書館車

1994年秋から同会では、新しいプロジェクトも始まっています。それは英語の本だけでなく、本を積んで南アフリカの大地を走り回る移動図書館車を送ろう、という画期的な試みです。

限られた図書をより多くの地域で、より多くの人々に読んでもらうには移動図書館が有効。現地の人々のそんなリクエストに応える形で、このプロジェクトは着手されました。

車は埼玉県内の自治体が廃車にした移動図書館車用のマイクロバスを、大宮市の自動車整備会社経由で無料で譲り受けることになっています。また車の輸送は、本の輸送を引き受けている大手商船会社が、やはり無料で担当してくれる予定です。

図書館車に積み込む本の不足分を補うために、カナダの市民団体「インターナショナル・ブックバンク」から英語の絵本や小説など数千冊を取り寄せることも検討中です。南アフリカで関税上の特別措置が認可され、受け入れの許可が正式に下りさえすれば、車はいよいよ海を渡ります。この移動図書館車は、やがて日本と南アフリカの人々の小さな心の架け橋になってくれることでしょう。

この文は外務省が企画した「アフリカで活動する日本のNGO文庫」（編集はアフリカ日本協議会）のために書かれたものです。

ただ本や車を送るだけでなく、それが有効に使われているか、何がより求められているのかをチェックし、送る側と送られる側が喜びも哀しみも分かち合い、共に学び合い、共に新しい関係を築いていく——。同会の名前の通り、世界の人々と“共に歩む”そんな意識が、私たち日本人には今、強く求められていることではないでしょうか。

最後に会報「南アフリカ —— 自由の声」から、野田代表の印象的な言葉を紹介します。「大きな愛くるしい目をして、好奇心と嬉しさにはちきれそうな笑顔で、私たちの訪問を迎えてくれた子供たちは、これから先、自暴自棄になることがないように、忍耐強く希望を実現していった欲しい。私たちは（南アフリカの再建という）こんなに大切な時期に、南アフリカの人たちの本が欲しいという願いに、ほんの少しでも応えていくことができるのを本当に嬉しく思っています」

## アフリカからの手紙

久我 祐子訳

### 南アフリカから

1994年10月26日

野田千香子さん

拝啓

たった今コンテナ倉庫から戻ってきました。そこで、あなたが最近送ってくれた本の中から29箱分を受け取ってきました。まるで、クリスマス時の幼い子供になったような気持ちです。1箱ずつ開ける度に、中に入っている素晴らしい宝物を見つけてワクワクと気持ちが高まる一方でした。特にきれいな辞書を見つけた時はとても嬉しかったです。辞書は、母国語が英語でない生徒

から常にたいへん必要とされています。これらの辞書は、1セットずつアレクサンドラ（私たちの活動拠点のタウンシップ）にある4つの高校に配ることができると思います。“A Time to Fight, A Time to Love”（注1）は、特に心踊らせる本です。これは悲劇的な事件や最近の勝利など、南アの貴重な歴史の概略です。また、他の国の人々が私たちの歴史に興味を持っていることを知るとは、生徒にとって励ましになります。

注1 高校生向きに書かれた南アの英語の歴史書。大友隆智著、朝原書店刊、日本語訳付きで520円。南アにはこれまで南アフリカの現代史がほとんどないので、当会で本書を400冊購入して南ア各地の団体、学校に送付しました。

私はこの本がまた、生徒が他の国について学ぶ励みになることを願っています。

私は日曜日にこの地域のすべての学校の代表者と会って、本の分類や分配をする日取り(来週)を決めます。これにより、分配が公平に行なわれ、関係者全員が取り決めに参加できるようになります。この過程が終了したら、またあなたにお手紙を書きます。

現在私たちは、正規の教育セクターおよびインフォーマルな教育セクターと一緒に、一連の集中ネットワーク・ミーティングに携わっています。このミーティングの趣旨は地域に勉強する環境を取り戻すこと、および持っているすべてのヒューマン・リソース(人的資源)や物質的資源を最大限に活用すべく計画を練ることです。これは、参加者全員にとって非常に有効で情報豊かな時間となっています。

あなたの会からの支援のように海外から支援が来ると、特に、私たちは皆励まされます。再度お礼を申し上げます。私たちの格別な奉仕に対して神のご加護がありますように。

マリイ・ステイシイ  
ローズアクト コーディネーター

## ザンビアからの手紙

1994年12月12日

野田千香子様

あなたから非常に教育に役立つ小学生用の本を受け取ったことを喜んでご報告いたします。私たちの目的は社会に奉仕することです。そのため、役員会に野田さんたちのことを主要なドナーとして紹介し、送られた本を、英語の本が全くない地方の学校に寄付できないかどうか相談するつもりです。

左記の手紙の中にあるアレキザンドラ地区は、昨年の4月選挙前にしばしば新聞紙上に暴力事件の多発が報道されていた地区です。アレクザンドラについて「黒人の教育を支える会」の大友深雪さんに訪ねられた時の印象を伺いました。

## アレキザンドラ地区の印象

大友 深雪

1991年8月に初めて南アフリカを訪れた時に立ち寄ったアレキザンドラは、都市型貧困の荒みの中に虚無をバネとするかのような不気味な緊張を漂わせていた。思えばその年の3月に教育施設の充実を要求して、教育訓練省の前でハンガーストライキ2週間目に入ったとウイークリー・メール紙に報じられた12人の学生はアレクザンドラの中・高生たちであったし、アバルトヘイト抵抗文化の拠点の一つにアレクザンドラ・アート・センターというのがあった。あの時私が感じたアレキザンドラの緊張は、プレトリアとジョハネスバーグに挟まれ、政治的にも経済的にもアバルトヘイトの直撃に痛み付けられてきた「黒人居住区」のアフリカ人たちの計り知れない怒りだったのだと思う。  
(1994. 12. 30)

これが実現したら、この寄付に関する記事をお送りします。いただいた本は長い期間子供たちに役に立つことになります。ザンビアでは小説は非常に高値なので、これらの本は子供たちが入学後、最初の6年間、使用されることになるでしょう。

千香子さん、私たちはこのすばらしい寄付に対しとても感謝しています。今後もし古

着やおもちゃを集めることがありましたら、私たちに送る小包にそれらも入れていただけないでしょうか。この地域の子供たちおよび一部の大人は、多くの物質的援助を必要としています。

再度お礼を申し上げます。本の受取先の学校が決まったら、その学校の名前をお知らせします。

心をこめて

ワンガ・ムンバ  
環境人口問題センター理事  
ザンビアのルサカ

\*ワンガ・ムンバさんは、1昨年の秋にアフリカシンポジウムに招かれて来日しました。野田がお会いした際、南アだけでなくザンビアでも図書館も学校も本がなくて困っているのでぜひ送ってほしい、と言われ、郵便小包でダンボール数箱を送りました。

右がワンガさん 1993年秋来日

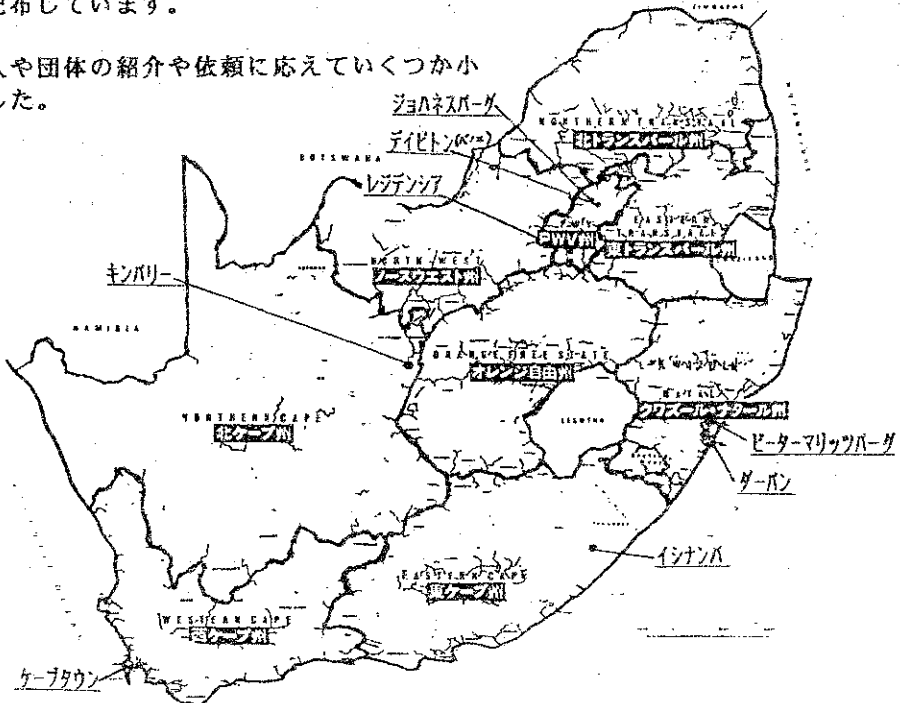


## アジア・アフリカと共に歩む会の本の主な送付先

大口（コンテナ1台分）で送っている所はデイトン（ベノニ）とダーバンです。キンバリーとイシナンバとピーターマリッツバーグは地域のセンターに、レジデンシアは中学校に、ケープタウンは保育園に郵送で送っています。ベノニとダーバンはその組織が近隣の数10の学校などに配布しています。

## 南アフリカ共和国

その外にも知人や団体の紹介や依頼に応じていくつか小口で送付しました。



1994年(平成6年)12月24日(土曜日)

# 読書の楽しさ伝えたい



南アの人児童には読書も十分に行き届いていない。今年月、現地の小学校を視察する野田千香子代表也

# 南アの子供に 移動図書館車

埼玉の市民団体

「教科書も十分はない南アフリカ共和国の子供たちに本をよんで読んでほしい」。埼玉県の県民グループのこんな願いが実現し、日本で廃車になった移動図書館車三台が南アに贈られることになった。同県内の二つの自治体と自動車整備業者が車両を提供、南ア東部の海外のボランティア団体が協力した。メンバーは誰が南アの大地を駆け回る姿を思い浮かべながら、「この秋を機に、国内でも南ア援助への関心が高まれば」と期待している。

## 自治体・企業も 協力に名乗り

## 来夏にも3台寄贈

この市民団体は埼玉県野市に本部がある「アジア・フリカ共に歩む会」(野田千香子代表)。

同会は、九年四月の設立以降、関西のインター・ショナルスクールや、東京、大阪など全国の英語話学校など連携して、これまでに、百科事典や辞書辞林など約五万冊の英字図書を集め、南アの小学校など七校に、主に、南アの人児童の教育条件の改善に取り組みしてきた。

移動図書館車を贈る活動は今、九月にスタート。同会が東京、埼玉などの約八十市町村に車の提供を要請したところ、埼玉県松伏町や埼玉、越谷市の自動車整備会社が、現在は廃車になった移動図書館車のマイクログラス二台の無償提供を承諾、前船市も近く廃車になる一台を提供するところ。現地への輸送は東京、大阪の商船会社が協力の名乗りを上げている。

車に積み込む書籍は、米国のボランティア団体「インタナショナルブックバンク」(IBB)本部・メリーランド州ボルチモアに支援を要請。英字の童話や絵本、教科書などを中心に約二、三千冊を取り寄せることが決まっており、南ア政府で受け入れの許可が下れば、来年度にも、南アの子供たちの元にも贈られる予定という。

種別種政策の下、白人と黒人を分離した差別的教育が実施され、アパルトヘイトが徹底された今年五月以降も黒人児童に十分な教科書が行き届いておらず、小中学生の読書率は極めて低い。

この実情を踏まえ、同会は今、三月、南アの人児童団体のうち、ヨハネスブルクに近いデベイトン自治体などを視察。その際、同地区の小中学校敷地を見学したが、生徒数千五百人クラスの小学校でも図書室に書籍がわずか数十冊という所がほとんどで、生徒には「星の王子さま」や「アンネの日記」を思いっきり読みたいという声が多かった。同会がこれまでに郵送した書籍も子供向のものも少なかつたうえ、一部の児童に行き届かず、「できたら多くの子供たちに読書の楽しさを伝えたい」(同会)という思いが、今回の取り組みにつながったという。

代表の野田千香子さんは「アパルトヘイト撤廃後の南アに必要なのは、健全な教育環境。将来を担う子供たちの支援を通じて、人種差別政策の根拠を断絶し、日本でも身近に感じてもらいたい」と話している。

問い合わせは、電話048-812-8277の同会まで。